

# 中国・インドネシア関係秘史

## ——毛沢東のアイディット追悼詩について

蔡毅

毛沢東は長い間中国に君臨していた最高指導者であるのみならず、アジアないし世界に影を落とした重要な歴史人物でもある。筆者は毛沢東が中華民族にもたらした多大な苦難を徹底的に清算しそれを全面的に批判すべしと主張したいのだが、彼の客観的な歴史存在を無視してはいけないことも十分認識している。ここでは、中国・インドネシア関係史の研究者に資料を提供するため、毛沢東について未だ広く知られていないある事実を紹介したい。それは、毛沢東が1965年12月に書いたアイディットを追悼する漢詩の存在である。

1965年9月30日、スカルノ（Sukarno）政権と連携していたインドネシア共産党がクーデタを起こした（とされている）が、たちまちスハルト（Suharto）をはじめとする軍部に鎮圧され、書記長のアイディット（Aidit、中国語訳名は「艾地」）も11月22日に殺害された。この事件は当時の国際共産主義運動にとって大きな打撃だったうえ、アイディット個人が生前5回も中国を訪問し毛沢東と面会したことがあるので、毛沢東は中国共産党のリーダーとして、友党同志の死に対して当然ながら大きな悲しみを抱いて、年末にアイディットを追悼する詩を作った。

卜算子

悼艾地同志

ぼくさんし  
卜算子

艾地同志を悼む

疏枝立寒窓

笑在百花前

奈何笑容難為久

春来反凋残

疏枝 寒窓に立つ

笑（=咲） 百花の前に在り

奈何せん 笑容の為すこと久しきは難きを

春来たれど反って凋残す

残固不堪残

何須自尋煩

花落自有花開日

蓄芳待来年

残 固より残に堪えず

何ぞ須いん 自ら煩を尋ぬるを

花落つれば自ら花開く日あり

蓄芳もて来年を待たん

この作は普通の五言・七言といった漢詩ジャンルではなく、一種の特別な体裁「詞」

(ツ一、詩と音読みが同じなので、現代中国語の音をあててというのが通例のようになっている)である。このジャンルは、唐代に西域からはいった音楽につけてうたった歌詞が文学形式として定着したもので、曲によって句数・字数・平仄・韻脚が定まっており、それに合わせて歌詞を填(う)めて作る。そこで「作詩」とは違って、「詞」を作ることを「填詞」という。この作の「卜算子」は曲名(普通は「詞牌」という)で、四十四字、前後段各四句となる。毛沢東は詞というジャンルを愛用し、彼の現存する詩作では詞が大半を占めている。

この詞の内容は大体次の通りである。

まばらな梅の枝が春まだ寒い窓の向こうに見える。花を咲かせるのは他のどの花よりも早かったが、残念ながらそのすばらしい笑顔は長く見ることができず、春がようやくやって来たのに、かえって散ってしまった。

散ってしまったのが残念でならないが、これ以上はあえて悩むまい。花は散るけれど必ずまた咲く日もある。残り香を慰めに来年の開花を待とう。

この詞は中国古典詩の伝統的な「比興」、すなわち比喩・象徴という手法を用いて、アイディットのことを梅に擬し、彼の死を散る花に譬えながら、世界革命の大きな流れからみればこれは一時的な低潮にすぎず、来年の開花=将来の勝利を期待しようと締め括っている。この梅のモチーフは、実は中国の伝統文化および毛沢東個人の好みにもかかわっている。梅は他の多くの花と違って厳寒の冬に咲くという特徴があるため、中国においては「歳寒の三友」(松・竹・梅)や「四君子」(梅・蘭・竹・菊)のひとつであり、つねに高い節操の象徴として詠われている。そして毛沢東の詩作にも、彼のいわゆる革命ロマン主義とも相まって、梅のイメージがよく登場している。例えば、1962年12月に作った「冬の雲」と題する詩に、

梅花歡喜漫天雪	梅花 歡喜す 漫天の雪
凍死蒼蠅未足奇	凍死せる蒼蠅ありとも 未だ <sup>とりあぐ</sup> 奇るに足らず

という一聯がある。ここでは「梅花」は真のマルクス主義者、「蒼蠅」はソ連「修正主義者」を含む革命の裏切り者たちを指すのである。しかし、梅についてもっとも有名なのは、おそらく、「冬の雲」の前年1961年11月に作った次の作品である。

#### 卜算子

詠梅。読陸游詠梅詞、反其意而用之

梅を詠ず。陸游が梅を詠ぜし詞を読み、其の意を反にして之を用う <sup>こころさかしま</sup>

風雨送春帰	風雨 春の帰るを送りきて
飛雪迎春到	飛雪 春の到るを迎う
已是懸崖百丈冰	已に是 懸崖の百丈の氷なるに
猶有花枝俏	猶 花の枝の <sup>あやにうつく</sup> 俏 <sup>わがもの</sup> しきが有り
俏也不争春	<sup>あやにうつく</sup> 俏 しけれど 春を争とせず
只把春来报	只 春の来るを報ずるのみ
待到山花爛漫時	山の花 爛漫たる時 待到らば
她在叢中笑	<sup>かのじよ</sup> 她 <sup>はなむら</sup> 叢 <sup>え</sup> にありて笑まん

「俏」は美しいという意。「她」は女性を指す第三人称、彼女のこと。この字は20世紀前半ヨーロッパ文学が入ってから新しく造られた文字で、女性に限らず、抽象的な事物に対して尊敬語として使うこともあるが、ここは梅の実をさす。

春は風雨に見送られて帰ってき、さらに、吹雪に迎えられてやって来た。高い崖に百丈ものつららが下っているが、そこに、美しい花の枝がある。早春の試練に耐えて咲く梅の花だ。

美しいけれども、それによって、春の美しさを独占し世にときめこうというのではない。ただ、来るべき春のさかりを予告しているだけなのである。やがて、爛漫と山に花が咲き満ちたとき、先駆者の役目を終えた彼女・梅は、実を結び、ほかの花に囲まれながら満足の笑みをうかべているだろう。

この時、毛沢東の主導で中国はかつての同盟国ソ連と反目し、孤立無援の状態に陥っていたため、毛沢東はこの詞を作って、寒気を恐れぬ梅の花を手本とするように、党员たちを激励した。梅は革命の先駆者、冬は反革命の勢力、春は革命の気運、山花爛漫は革命の大衆蜂起——それぞれの譬えによって詞の昂揚感に満ちた境地が構成されている。この詞は最初、党の上級幹部の間で伝えられ、のちに状況がやや好転して“寒気”が減少したので、翌年はじめて公表された。現在の毛氏の詩詞集では、多くは「1962年12月」の作としている。

なお、詞の序の「陸游が梅を詠ぜし詞を読み、其の意を反にして之を用う」という文言にも注目すべきである。「反其意」とは、詞の趣旨・境地を逆転させることで、陸游の詞は「愁」、毛沢東の詞は「笑」と郭沫若は解釈しているが、参考のためまず陸游の原作を引いておく。

卜算子  
詠梅

卜算子  
梅を詠ず

駅外断橋辺	駅の外れの断れし橋の辺
寂寞開無主	寂寞 開けど 主なし
已是黄昏独自愁	已に是 黄昏にして 独自 愁え
更著風和雨	更に風と雨に著たる
無意苦争春	苦く春を争う意なく
一任群芳妒	一に群芳の妒に任ぬれば
零落成泥碾作塵	零落 泥と成り 碾されて塵とこそ作れ
只有香如故	只 香のみは有り 故の如く

宿駅のはずれ、崩れた橋のたもと、ひっそりと咲く梅。見る人もいない。もう夕暮れ、やがて闇につつまれようとして、ひとり悲しみ愁えている。そして、さらに風や雨にまで、苦しめられている。

梅は、無理に競争してまで、自分の美しさを際立たせ、われこそは春の化身と名乗る気はない。ほかの嫉妬する花のことはすっかり放置して気にもとめない。梅は散り、花びらは泥にまみれて粉々になる。それでもなお、梅の気高さを示す芳香だけは変わらず、あたりに匂っている。

(上記の二首の読み下しと現代語訳は主に武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』(文芸春秋, 1965年)を参照した。)

陸游(1125~1210)のこの詞の作年は、49歳説(朱東潤)や60歳以後の晩年説(郭沫若)など諸説がある。陸游の詞の注釈においてもっとも権威がある夏承燾・呉熊和『放翁詞編年箋注』(上海古籍出版社, 1981年)では慎重な扱いで、「不編年」の部に入れられているため、ここでもそれに従って断定はしない。ただし筆者は、これが人生の不運を十分に味わったあとの陸游の自画像にふさわしく思われるので、どちらかといえば晩年説に味方したい。

陸游は南宋の著名な詩人で、北方を占領している金に抵抗して国土を回復しようと主張する「主戦派」だったが、権力を握っている現状維持の「主和派」に抑えられ、失意の一生であった。この詞で彼は梅に託して自分の志を示そうとした。寂莫たる孤独であっても、散って泥となっても、その「香」、すなわち潔い精神は不滅のものと自負している。とはいえ全体の雰囲気には悲愴感が漂い、一種の屈折した意識が行間に潜んでいることも否めない。

それに対して、毛沢東は「其の意を反にして」、いわゆる革命楽観主義に基づき、一時的な挫折があっても真理は必勝という信念はゆるがない。陸游の梅のイメージを転換し、孤高・壊滅の悲劇的な存在ではなく、革命の先駆者として先頭に立って戦

い、最後に「山花爛漫」の季節になったら、すなわち革命が勝利したら、梅が奮起する大衆と一緒に喜ぶ、という発想である。この意味からみれば、アイディットを追悼する詞における梅の構想もほぼ同じで、「笑」という表現も一致しており、背景は毛沢東の独特な理念によって貫かれているので、この二作を姉妹作と言ってもよからう。

さて、この毛沢東のアイディットを追悼する詞は、なぜ今までインドネシア研究関係者の間でほとんど知られていなかったのか。考えられる理由の一つは、インドネシア共産党が弾圧された直後、中国共産党も「文化大革命」に突入して外に目を向けるゆとりはなくなり、その後両国の国交さえ凍結されて、双方のつながりは長い間ほぼ断ち切られていたという事情にあるだろう。だがもっと重要な原因として、実はこの詞は正式に毛沢東の作品として公表されてはいないことが挙げられる。中国政府の関係部門に公式に認定され、かつ毛沢東が生前に確認したとされる詩詞集、例えば1963年出版の『毛主席詩詞』（人民文学出版社、北京）は時期的に間に合わないにしても、毛氏の没後1986年出版の『毛沢東詩詞選』（鄧小平が書名を揮毫、出版社は同上）および1996年毛沢東逝去20周年を記念するため中央文献出版社（北京）によって刊行された『毛沢東詩詞集』にも、依然としてこの詞は収録されていない。その上、言葉の表現には詞律（詞を作るとき守るべき格律）に合わないところもあるので、本当に毛沢東の作品であろうか、と疑問を抱く人も少なくない。

しかし、ほぼ間違いなく毛沢東の作だが様々な原因で上述の三書に入っていないものはほかにもかなりあるので、これだけを理由として否定するならやはり強引といわざるを得ない。この追悼の詞より先に作られた「詠梅」と同じ詞牌「卜算子」の利用、毛沢東のロマンチックな詩風、当時の国際情勢等の諸事情を踏まえれば、これを毛沢東の作と認定して大過無からう。筆者が知るところに限っても、劉濟昆『毛沢東詩詞全集』（香港崑崙制作公司、1991年）、蘇桂『毛沢東詩詞大典』（広西人民出版社、1993年）、季世昌『毛沢東詩詞鑑賞大全』（南京出版社、1994年）などいわゆる「民間」の研究者が編纂した「全」「大」を標榜する毛沢東の詩詞総集には、いずれもこの詞が収められている。そしてもっとも有力な裏付けは、中国共産党機関紙『人民日報』の公式ウェブサイト「人民網」[www.people.com.cn](http://www.people.com.cn)にもこの詞が堂々と姿を見せていることである。中国指導部の口舌と言われる「人民網」の威光に鑑みて、この詞の真偽についての論争には終止符が打たれたと理解してもよからう。ただし、最初どの刊行物に掲載されたかはまだ分かっていない。おそらく「文化大革命」中のことであろうが、これについては今後の課題としたい。

ちなみに、この詞がネットのみで、あえて信憑性が高い正式な出版物の毛氏の詩詞集に載せられなかった理由は、前述の「偽作」の理由の一つともされる、詞律に合わないところがあるという指摘にかかわるのではないかと筆者は考える。確かに、平仄

だけ見るとこの詞は明らかにルール違反で、弁解の余地はないのだが、これを否定の根拠とすることはできない。なぜなら、実は毛沢東の本当の詩才がわれわれの想像より低かったことが、最近になってようやく判明したからである。すなわち、彼の生前に公表された詩作は、郭沫若・胡喬木・田家英らをはじめとする専門家のチームによって随分推敲されたものなので、完璧に近いのも当然のことなのである。逆に一定のレベルに達しないうちは公表しないということだったのであろう。最新版の1996年出版の『毛沢東詩詞集』巻頭の「中共中央文献研究室」署名の「出版説明」の一句は、その天機を漏らしている。「これらの詩詞は、一般的に言えば作者の最も優れた作である（這些詩詞一般地說是作者的上乘之作)」。つまり逆に言えば、「上乘」でない作品も当然あるはずであろう。ところが、毛沢東の死後、こうした「添削作業」のチームはもはや存在せず、著者本人の了承を得るのも不可能なので、様々なルートを通して彼の「駄作」もありのままの姿で世間に流出してしまったわけである。筆者は時々「こんなものか」と思うこともあるが、正直に言うと、アイディットを追悼する詞は新たに公表された毛氏の詩作の中ではまだマシな方だと申し上げておきたい。

ともあれ、毛沢東は共産主義革命家のリーダーとして、同志の死を悼む際、将来の巻き返しを期待しようという理想を詩作に託したのである。繰り返す言うが、筆者は毛沢東の批判すべきは批判したい。だが、だからといって彼が歴史に残した痕跡を抹消しようとするわけでもない。今回は毛沢東のあまり知られていない歴史上の事実をひとつ紹介した。日本のインドネシア研究者への資料提供の一助になれば幸甚である。